

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

テキストの表記について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1127

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



テキストの表記について

翻字の原則 活字テキスト (図1) および手書きテキスト (図2, 図3, 図4) の翻字に際しては, 本書においても [第一部] の原則が守られている. すなわち, 教会スラヴ語の伝統に準じて, 出現位置によって使い分けられていた複数の文字を, それぞれのグループについて一つに統一する ($\text{А} - \text{И} - \text{Я} \rightarrow \text{Я}, \text{ОУ} - \text{Ѹ} - \text{У} \rightarrow \text{У}, \text{Ѡ} - \text{О} \rightarrow \text{О}, \text{Є} - \text{Е} \rightarrow \text{Е}$) が, Ѳ および $\theta \xi \psi$ は外来語の表記や数値の表示という特殊な機能を持っているので保存した. Ѳ は [第一部, 18] でも述べたように, 音韻的に独立した価値を持つ母音を表す文字ではなかったようで, /e/ を表す文字 (E, Є) や, 稀に /i/ を表す文字 (И, Ъ) と混同されている. しかし, 多くの場合, この文字は正しく使用されており, 位置によって他の文字に取って代わられるものでもないもので, ありのままに再現することにした.

分かち書きの原則 [第一部, 20] で後接辞 (主として $\text{въ}, \text{съ}, \text{къ}, \text{по}, \text{при}$ などの前置詞) と前接辞 ($\text{для}, \text{бы}, \text{ся}, \text{же/жь}$ など) をそれらの直後あるいは直前の単語と分離すると述べたのであるが, 現実には一貫性に欠けていた. そこで, 本書では以下の原則に従って, 後接辞および前接辞を分離または接合することにした.

- 前置詞 ($\text{въ}, \text{съ}, \text{къ}, \text{по}, \text{на}, \text{при}$ など) および後置詞 ($\text{для}, \text{ради}$) は分離する. ただし, 副詞 $\text{потомъ}, \text{предьтымъ}$ は非分離.
- 接続詞を形成する前接辞 ($\text{же}, \text{бы}$) は接合する ($\text{потомуже/потомужь}, \text{хотяжь}, \text{ве(д)же}, \text{якоже/якожь}; \text{жебы}, \text{ижьбы}, \text{чтобы}, \text{штобы}$). ただし, 条件を導く接続詞 естьли бы は分離する.
- 強調の же は分離する ($\text{тое же}, \text{такое же/жь}, \text{какое же}$). ただし, 副詞 тежь は非分離.
- 前接辞 ся は動詞の直後にあるときには非分離だが, 直前にあるときには分離する (例えば, почалься に対して ся почаль). 前置詞と結合して副詞を形成する場合は非分離 (предься).

記号と字体の意味 教理問答の本文中で使用されている記号類の意味は以下の通りである.

|| ページの境界

[] 判読な困難な文字や句読点の補完. たとえば, [л] は「判読しがたい文字が一字あるが, 文脈上 л と考えて差し支えない」ということを意味している. どの文字なのかという判断がつかない場合は, 推定される文字の数だけアスタリスクで表す (例えば, [**]).

[→] 活字テキストの誤植, ならびに手書きテキストの綴りの間違いの訂正.

- < > 欠落した文字や句読点の補完. ただし, 句読点については文や節の区切りが判別できない場合に限って補完する.
- () 語形の上方に書かれた文字.
- // 過剰な文字.
- [] 難読箇所 (これについては後で詳しく説明する).

書体はローマン体を採用しているが, 部分的にイタリック体を使用した. この書体変更によって強調されているのは, 『教理問答』本文中では, (1)ギリシャ語またはヘブライ語の単語をキリル文字で転写した箇所, および(2)上記の記号「[]」で囲まれた難読箇所である.

奇数ページの右余白と偶数ページの左余白にある斜体の数字は『教理問答』各葉の表にキリル文字の数字で記された連番である. 裏にはこのような連番はないのだが, 本書では便宜上 185v のように数字の後に文字 v (=verso) を付して明記する. [第一部]と同様に, 連番の数字の前にアスタリスクが付いていれば, そのテキストが手書きであることを意味している. なお, 第二部以降には「第二の筆跡」(これについては[第一部, 8-9]を参照)が認められず, 後述する難読箇所を除いて, 活字テキストか「第一の筆跡」の行書体(полуустав)で書かれたテキストしかない.

難読箇所について 『教理問答』第一部と第二部以降の大きな違いは, 欠落したページの数である. 第一部は105葉中12葉が手書きテキストによって補完されているが, 第二部から第四部までは, 148葉のうち34葉が補完されている. 特に, 第四部の第234葉から最後の第253葉まではすべて補完テキストである. 補完テキストは活字と比較すると読みづらいのであるが, 第二部以降は, 特徴の安定した「第一の筆跡」(図2)によって書かれているので, 判読にそれほど支障はない. しかし, 第130葉から第132葉までの3葉の欠落部分の補完テキストには, 全く別の筆跡(図4)が認められる. この部分で使用されているのは, 第一部のみに見られる「第二の筆跡」(図3)と, 『教理問答』モスクワ大学本全体に見られる「第一の筆跡」(図2)とは全く異なる書体であり, 判読が極めて困難であった.

すでに, [第一部, 7-9]で指摘したように, [Pozdeeva et al., 32]におけるモスクワ大学本の書誌には不明の点がいくつかある. 補完テキストの筆跡についても「18世紀の行書」としか書かれておらず, 二種類の異なる筆跡があることには触れられていない. まして, この草書による補完の存在にも, 第130葉から第132葉に見られる破損についても説明されていない. ただし, 「ところどころ余白に草書(скоропись)の書き付けがある」ことは指摘されている. 草書の書付の内容は, «Жикамонт третии бою мисю король польский великий князь литовский русский прусский жомосцкий мазовецкий»(第57葉裏—第58葉表)「ジギモント三世, 神の恩寵によるポーランド王にして, リトアニア, ルーシ, プロシア, ジェマイチア, マゾヴィアの大公」となっている.¹これは1587年から1632年までポーランド王とリトアニア大公を兼任したジギスムント三世(ヴァーサ)の正式な呼称である. 確かに, この書き付けというよ

¹ Жикамонт と жомосцкий は[Pozdeeva et al., 32]の読み間違いで, 実際には Жикимонт および жомоццкий と書かれている.

りも落書きは、数箇所に見られ、その筆跡はほぼ同一人物のものと考えて間違いはない。そして、使われている書体は、草書体というよりも、ジギスムント三世の即位直後に公布された『リトアニア法典』(Статут Великого Княжества Литовского)の印刷に使用された行書体活字(図5)に似ている。そもそも草書体は書簡や事務記録などの実用的な分野で利用される書体であって、教理問答のような神学的手引書には相応しくないので、これも行書体に属すると思われる。また、この特殊な書体の落書きがあるのは活字印刷のページのみで、第一および第二の筆跡による補完テキストの余白には見られない。従って、[Pozdeeva et al., 32]が示唆するように、モスクワ大学本が修復・製本されたのが18世紀中ごろであったとすると、問題の補完部分が書かれたのはそれよりも前の時代であった可能性がある。

岡本崇男

参考文献

- [Frick 1994] David A. Frick, "The Biblical Philology of Szymon Budny: Between East and West." In: Hans Rothe, Friedrich Scholz (hrsg.), *Biblia Slavica. Serie II: Polnische Bibeln. Bd. 3. Simon Budny, Biblia 1572*. Paderborn – München – Wien – Zürich, 1994.
- [Kamieniecki 2002] Jan Kamieniecki, *Szymon Budny — zapomniana postać polskiej reformacji*. Wrocław, 2002.
- [Kot 1956] Stanisław Kot, „Szymon Budny. Der größte Häretiker Litauens im 16. Jahrhundert.“ *Wiener Archiv für Slaventums und Osteuropas, Bd. II. Studien zur ältern Geschichte Osteuropas, I. Teil*. Graz-Köln, 1959. 63–118.
- [Pozdeeva et al.] И.В. Поздеева, И.Д. Кашкарова, М.М. Лепенман, *Каталог книг кириллической печати XV–XVII вв. в Научной библиотеки Московского университета*. Москва, 1980.
- [第一部] 岡本崇男 他, 『シモン・ブドニ『教理問答』(1562年) 第一部 テキストおよび解説』(「ルター派『カテキズム』東スラヴ語訳テキスト(1562年)の文献学的研究」研究班編)。外国学研究 56。

КЯТИХИЄІУЪ.

ча, дѣчь тѣишикого спасити не могли. Той
ѣдиный, сынъ божи сынъ, избѣетнолюди
своа спасаєть ѿ грѣховъ ихъ.

ПЫТЯНЬЕ.

Ѳпашь и тоє ми сѣяжи, чога дла сынъ
божий наречеса Хс;

図1 活字テキスト

ВОПРОСЪ :

Чого дла єдинъ толкъ исповѣдаемъ
црѣшь, а не єсть єдина, але порознь
мѣстехъ розныє єсть црѣви. Тако
нза аттла инша црѣвь была рим-

図2 「第一の筆跡」によるテキスト

Вопросы
 Которые сѣтъ дѣла противѣ помѣ при
 казанью, которые бѣго заслужитъ,
 ѿ вѣсто
 Много сѣтъ грѣховѣ на противѣ помѣ

图3 「第二の筆跡」によるテキスト

на фемисовѣхъ со мнѣтви дѣла бо дѣти
 ѿ вѣсто писаниѣ историческаго дѣла
 сѣ мнѣтви видѣти, и дѣла сѣтѣ на мнѣ
 и мнѣтви на хору, како на пѣсѣхъ,
 сѣтѣ по сѣтѣ сѣтѣ Апіа пра гнѣ
 сѣтѣ пише сѣтѣ словѣ. Де Егѣтѣ

图4 別の筆跡による補完部分

Для того абы себе стымъ легшюу Бискупности мести могълаб
 слибы втомъ хасе непереправилъ себе ласки нашоегъ Ррвсоечисто
 мбкому забини несправисахтогъ рымаю стасового зае зграми па
 ства нашего застмъ не стлсто нашимъ пропустити. Лев не до
 земли неприястисоечасго маюсть и мисти пере выистъе стлстау

図5 『リトアニア法典』の活字テキスト